



柔道は12日、最終日の男女2階級が行われ、男子100kg超級の原沢久喜(日本中央競馬会)は決勝でテディ・リネール(フランス)に敗れ、銀メダルでした。女子78kg超級の山部佳苗(ミキハウス)は銅メダル。

日本のメダルは金3、銀1、銅8の計12個となり、1大会の総数で最多となりました。男子は全7階級でメダルを獲得し、7階級制になった1988年ソウル五輪以降で男女を通じて世界初。原沢は決勝でリネールに指導一つの差で屈しました。山部は準決勝でイダリス・オルティス(キューバ)に有効を奪われて敗れ、3位決定戦でカイヤ・サイト(トルコ)に優勢勝ちしました。エミリア・アンデオル(フランス)が優勝。(時事)

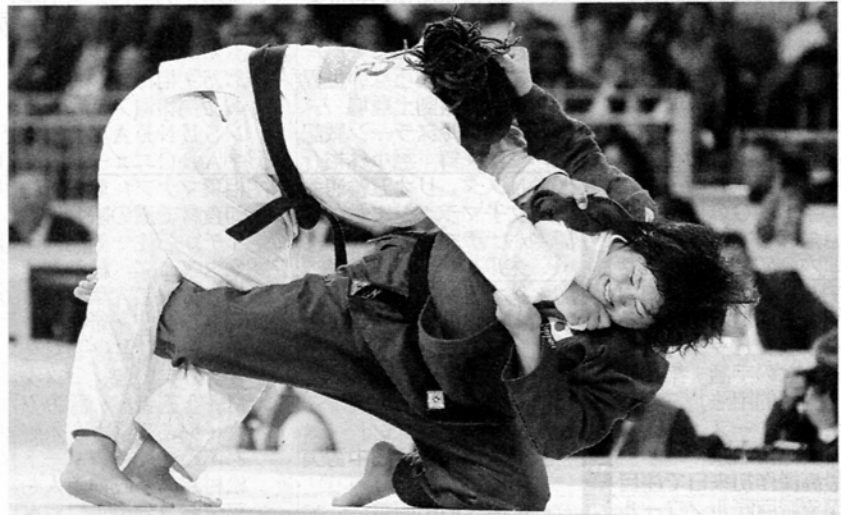
# 原沢 成長の銀

## 山部の力発揮銅

### 正木照夫の鉄人の目



原沢選手にとっては悔しい結果となった決勝ですが、柔道の内容では勝っていました。リネール選手は前回の2012年ロンドン五輪の時より技のキレ、スタミナが減っていますね。地力が落ちているから、自分に優位な組み手に持ち込み、相手に反則をとらせて勝つ戦法をとっているのです。リネール選手の戦法は、か



柔道女子78kg超級3位決定戦でサイト(上)を攻める山部佳苗(AFP時事)

なりスタミナを消耗します。この先も長く続けられるやり方ではない。対して原沢選手は足技がうまく、技のキレがあり、まだまだ伸びしろがある。まだまだ伸びしろがある。

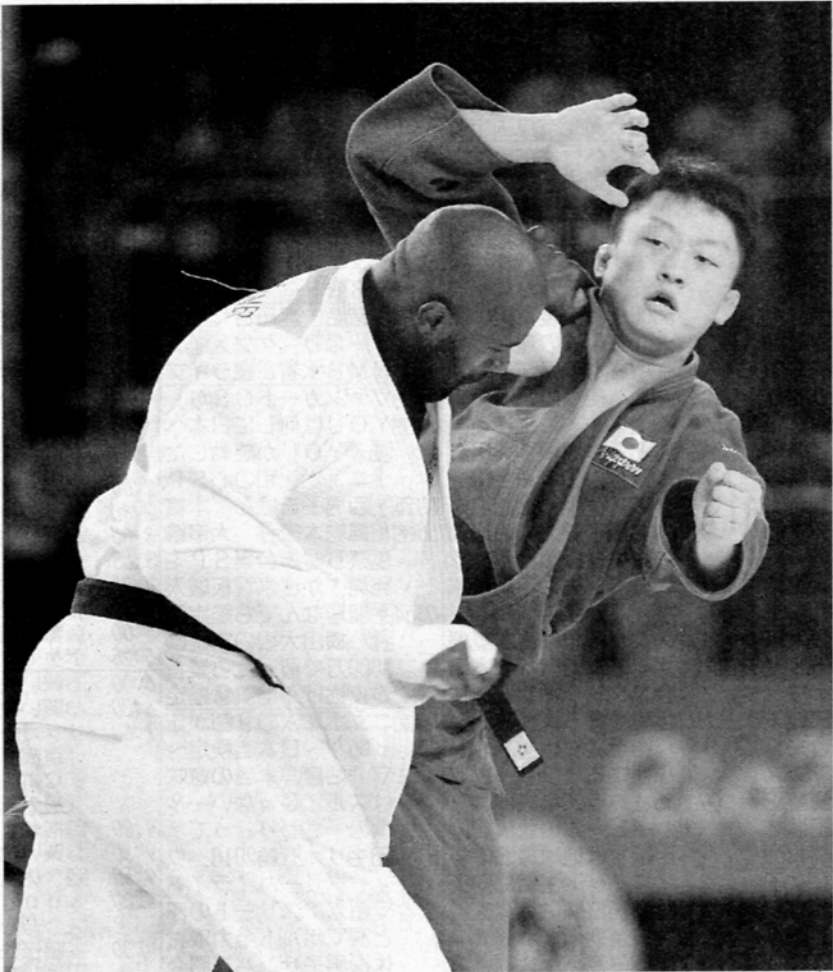
原沢選手は自分の柔道を貫き、「組んで投げよう」という姿勢を見せました。最後の試合を美しく締めくくったと思います。山部選手は準決勝のオルティス戦で、先に消極的だという指導をとられました。有効

をとられた時は、攻め疲れしていたように見えました。相手にも指導ができましたが、タイミングが遅かったと思います。3位決定戦では彼女らしい積極的な柔道で攻め、力を発揮してくれました。78kg超級は選手層が厚いですが、そのなかでよく頑張ったと思います。

今回は全体で金メダル三つをとり、男子は全階級でメダル獲得、女子も次につながる結果となりました。ロンドン五輪に比べれば大健闘です。ベイカー選手や田知本選手のような、それほど期待が高くなかった選手が優勝しました。重圧を感じず、のびのびやれて実力をだせたのでしょう。

井上康生監督の新体制になつてから、代表チームの雰囲気がかつと良くなりました。選手がスタップに対して気兼ねなく意見をぶつけ、明るく生き生きと練習しています。そこがよい結果につながったのだと思います。しかし、日本の柔道の歴史を見れば満足はできません。日本選手は半分以上の階級で優勝できる力を持っていると思いますから。(拓殖大学柔道部師範・八段)

## 選手とスタップ垣根なく



柔道男子100kg超級決勝でフランスのリネール(左)を攻めあくねる原沢久喜(時事)

## 組み手さばかれ技出せず

前回ロンドン五輪を制し、世界選手権7連覇中のリネールとの初対戦。原沢は積極的に前に出ようとした。だが、相手の巧みな組み手の前に逃げ切りを許した。原沢が序盤に二つの指導を受けたことで、リネールはまともに組み合うことを避けた。研究を重ね奇襲や組み際の技も狙っていたが「うまくさばかれた」と原沢。「何回か組んで、入れるかな」というチャンスはあったが、そこはまだまだ足

### 鼓動

### リオ発

「ない部分」と振り返っている。自らの柔道の完成度は「まだまだ半分を超えたくらい」。大舞台での悔しい敗戦が、原沢をまた一歩前進させる力になる。

ただ、最後の選考会となった今年の全日本選手権では技がまったく出ず、準決勝で敗れた。「自分から攻めて一本を取る柔道がしたい」と再起を誓った。五輪でもその姿勢は貫かれた。周囲からは「負けた後に必ず強くなる」と評されて

世界の注目が集まる五輪は競技の魅力発信する絶好の場でもある。そこでこのような試合が続けば、競技の魅力を大きく損ないかねない。(佐藤恭輔)